

『妙法寺記』並にその原本に就て

鹽 田 義 遜

妙法寺記は甲斐の郷土史料の白眉で、甲斐の史料としては餘りにも有名である。先づ順序上一往その解説を述ぶるならば、最初の版本たる文化版の跋に

妙法寺古記録二卷所傳_レ於_二甲斐國都留郡木立村妙法寺_一也。村在_二富士北麓吉田邑西、坂東路十許里_一、俗呼_二西方八村_一之二也。日蓮宗之古道場、而今尙存云、此記起_二於文正元年_一、終_二於永祿四年_一、九十六年間、甲駿越及坂東諸國之事蹟、可_レ徵者最多、乃至而共益_二於考古之學者_一。不_レ爲_レ不_レ多豈不_レ喜乎。

とある如く、古來小立村一體を勝山といふより、地名に則りて又一名勝山記といひ、寺名に依て妙法寺記と呼んだのであらう。現行する諸本の内容から見れば、單なる地名と寺名との相違ばかりでなく、自ら内容にも多少別の意味があると思はれる筋もある。

何となれば妙法寺記又は勝山記なるものは、少なくとも二つの觀點から見られる内容を有して居る。一つは妙法寺の記録と見ると、二には妙法寺に傳へられた記録と見るのである。即ち前者は日蓮宗中日隆を派祖とする八品派、即

ち本門法華宗に屬し、靜岡沼津在岡之宮光長寺の末で、本縣東山梨郡休息村立正寺と共に、宗祖の直弟中老和泉阿闍梨日法を開山とする妙法寺の記録、即ち妙法寺日記、又は妙法寺史を意味する記録の意である。後者は妙法寺に傳へられた或種の記録の意とも見られるのである。

以上の兩點から見らるゝ様に妙法寺記又は勝山記は、現存の諸本何れも卷首を缺損して居ることは、甲斐叢書の第八に載する「妙法寺年録」の最初に『前裂損』とあるに依ても明である如く、勝山の淺間神社所藏本も卷首がなく、又妙法寺所藏の横帖（長五寸、幅六寸）本も最初を缺損して居るので不明である。その内容は佛教中心の記録であり、謂はゞ一種の佛教年表である點から見て、恐らく欽明天皇十三年（AD 五五二）佛教渡來以來或はより以前の記録の様に思はれる。従つて本記録は佛教中心の年録で、それに天變地天等の重大事を記録したもので、爾來永祿四年（AD 一五六一）川中島合戦に及ぶ約千年間の記録である。而して妙法寺は永仁三年（AD 一二九五）の草創であるから、妙法寺の記録としてはそれ已來約二百六十年の分となるのである。これ二つの觀點から見られると述べた所以である。

二

然らば妙法寺記とは何れの内容を意味するかといふに、今の所謂妙法寺記の名は、後に全寺歴代の何人に依てか上述約千年間中、妙法寺創立後六十餘年後の文正元年（AD 一四六六）より、永祿四年までの九十六年間分が分割されて、妙法寺記と名づけられ、上下二卷に分冊別行せられ、後文化十五年東都松屋主人源與清に依て刊行せらるに至つたのであらう。

又本記録が妙法寺草創の永仁三年以來でなく、又八品派の開祖日隆が永享元年（AD 一四二九）八品分派以來でもな

く、文正元年を以てしたことは、妙法寺記上巻の最初に

文正元 丙戌閏十月廿五日

甲州東郡久速立正寺開山先師日朝上人御死去未尅、御供の弟子七十人導師は御弟子の内本蓮寺玉藏坊。（「叢書」

八二七）

とあるに依るに、今の文に立正寺開山日朝とあるは、これ休息立正寺第七世の本果日朝で、師は先に駿州岡之宮光長寺東之房に在つたが、應永廿六年立正寺に來り、後永享七年京都本能寺に八品の派祖日隆を訪ひ、互に八品所顯本迹勝劣の義を論じ、肝膽相照し道契頓に熟し、長錄・寛正の頃立正寺に在て盛に本迹勝劣の義を唱へ、西隆東朝と呼ばれたのであつた。然るに當時岡之宮休息は第二祖日乘以來兩山一寺の格にあつた故に、日朝の勝劣義に風靡せられ、妙法寺もその配下にあつたのである。休息に於ても今日日朝を中興と呼ぶが、異端勝劣義の開山の意である。かく東國八品派祖日朝の遷化を以て一時期を劃すのと、又妙法寺記跋に

此記起於文正元年、終於永祿四年九十六年間、甲駿越及坂東諸國之事蹟可_レ徵者最多

といふ記事の内容からの郷土史料とを傳へる故に、妙法寺の記録中より文正以後が別出せられ、後に上下二卷として刊行せられたのであらう。現に同寺に同様の内容より成る二巻の草本が保存せられて居るが、是等が傳寫せられて刊行せらるゝに至つたのであらう。

因に「甲斐志料集成」（七、三）本は東郡を當郡に、又久速を久遠に作つて居るが、久速は休息の普通で立正寺は今の立正寺で、岡之宮・小立と共に日法の開山で日朝以來八品派に屬したのであるが、中頃天正十九年十三世日定の時に身延に屬し、爾來今日に及んで居るが、八品派では後に藤木に立正寺を立てゝ、休息の立正寺に代へて居る。

斯の如く妙法寺記には前述の如く、内容から見ても兩様の本があるが、更に續群書類聚第八百七十八卷の雜部二十八に掲載する「甲斐國妙法寺記」本がある。それは前述の上卷を文正元年〔享祿五年、下卷を天文二年〔永祿四年とする上下二卷の前に、更に單に「妙法寺記」として曆應元年（AD 一三三八）〔寛正六乙酉（AD 一四六五）に至る、百廿八年間の記事が添加せられて居る。然るに「甲斐叢書」の所依たる勝山淺間神社本は、最後の寛正元年庚辰より三年壬午に至る三年を脱し

長祿元、二、三（寛正元、二、三）四、五、六乙酉改元（叢書八一七）

となつて居るが、妙法寺所藏本は此點の脱落がなく、又同本が天文十七年以下十三年間を闕くに對し、神社本が僅に永祿の三、四兩年を闕くに徴しても、妙法寺本が恐らく最古本かと思はれる。併しその點は更に後日の研究を期したい。

然らば第三本は何故に曆應元年以來の記録を收めたかといへば、それは矢張曆應元年よりした別行本のあつた事が想像せられるのである。何となれば曆應年代を見れば

曆應元、

二、常州發向

三、

四、本院治十年、光長寺第二日上人御遷化（叢書八二六）

とある如く、開山の日法の遷化を以て一期とした分け方に依つたものである。随つて常州發向とは妙法寺の當主の常州行を記したのかも知れぬ。又日法を光長寺第二祖とするは宗祖を初祖とする例に依つたのはいふ迄もない。斯く第三

書が日法の遷化を以て分割したことは、第二書が中興の日朝の遷化を以て劃したのから見ても肯かれる。併し此の第二第三の兩書は、何れが先かは不明であるが、二卷本は文化十五年刊行であり、第三の曆應以降本が奥書に

文政九年孟秋上幹 江戸蓮堂小林峽源正與校書、干註子之寓居。

とあるに依るに、文化十五年改元して文政となつた故に九年後校合である。又文化本の源與清と、文政本の源正與とも或は父子の關係かとも見られるが、當時斯様の兩様の別行本のあつたことは想像が出来る。且つ第三本は二卷本の刊行後に出来たことは、第三本が妙法寺記と上巻と下巻の三部から成立つて居る點からも明かである。

三

以下現行の諸本に就て見るに第一本としては

一、妙法寺 所藏本

寫本

一帖（縦五寸、横六寸、横帖大和綴、四十五紙）

二、淺間神社 所藏本

寫本

一帖

三、甲斐叢書、第八

昭和十年版

の三本あるが、その他前二書の傳寫本は廣瀬廣一氏等が所藏する所である。第二本としては

一、妙法寺 所藏本

寫本

二卷

二、文化十五年版

二卷（木版）

三、續史籍集覽、第一

村崎融弼所藏本

明治廿六年版

四、信濃史料叢書、第五

大正三年版

五、甲斐志料集成、第七

昭和八年版

以上の五本があり。第三本としては

○續々群書類従（第三十輯上） 昭和七年刊

の一本があるのみである。今上掲三本の紙数の相違を且く甲斐叢書本に就て見るに

第一本 自二五一頁 至二九四頁 二十二枚 (AD 一五六一) 一〇一〇年間

第二本 自二七一頁 至二九四頁 十二枚 (AD 一四六六) 九六年間

第三本 自二七六頁 至二九四頁 十四枚 (AD 一三三八) 一二四年間

右の如く第一本の千年の記録は、第二本の約百年間の記録と粗ぼ同一紙数なる點から見て、中興の日朝遷化頃から次第に記録が詳になつたことが觀取されるのである。随つて文正頃以前と以後とは廣略の別のあることは、以前の記録は前述の如く妙法寺に傳へられた記録であり、以後の記録は全く妙法寺の記録であり年録であることは、記録の内容から見ても明かである。即ち前者は寫傳であつて勿論其の内容に相當重要な點もあるが、後の妙法寺の記録として書いたものとは、その態度とその性質とを異にしたものといはねばならぬ。これ文正以後が妙法寺記として單獨に刊行せられた所以である。

今第一本の妙法寺所藏本の文正以後と、第二本の妙法寺所藏本とを比較して見ても、同一記事であり乍ら第一本の記事の方が餘程簡潔に書かれて居る。第二本は云はゞ少し引き延して書いた觀がある。殊に妙法寺所藏の第一本は天文十七年 (AD 一五四八) まで、以下十餘年間の記事は見えないが、若しこれを省略したものとすれば、淺間神社本の方が古いことになるのであるが、記事の簡潔なる點から見れば反て逆に考へられるのである。従つて此等兩書の新古の

問題は、記事の内容その他種々の角度から、充分に研究した上でないと判明しない。

孰れにしても第一本は古傳の寫傳を中心とし、その記事に習つて次第に新事實を書き傳へたもので、その新事實の記録の分が正しく妙法寺記といふ名に相當するのである。上來の寫傳の分迄を一緒にした甲斐叢書の如く「妙法寺年録」といふか、また古來の別稱の如く「勝山記」と稱するが適當である。

然らば第三本と第二本と相違は如何といふに、即ち第三本の曆應元年から寛正六年に至る、一百二十九年間の記事は見様では、前と殆ど同一態度を以て同一程度に記録したとも見られるのである。此に於てか文正以前の分は果して何時、何人が何に依て寫傳せられたかゞ問題である。此に就ては本書の研究すべき點は全く第二本又は第三本と第一本と聯絡點にあるべきである。

四

此に於てか且らく文正以下を第二本、曆應以下を第三本とし、それ以前の恐らく傳寫と見るべき分を第一本とすれば、第二本と第三本とは前述の如く記事に廣略の別があり、第三本中の文正以前と第一本の記述の態度の相違は殆ど見出し得ないのである。先づ第一本中宗門關係の記事を求むれば、

貞應元、後堀河院義仁治二十二年八十二代、日蓮大聖人御誕生二月十六日

文永三、如來滅後二千三百四十歲

弘安五、日蓮大聖人遷化十月十三日、同六月十二日洪水

永仁(元)平左衛(門)入道同子息三人共に打るゝ也

延慶四、光長寺開山日春聖人御遷化

以上が所謂第一本の分の宗門關係の記事であるが、就中文永三年は佛滅二千二百十五年に當り、今の二千三百四十年とあるは、宗祖所依の佛滅年代と百二十五年の相違がある。更に此の他に注意すべきは

嘉元(元)今上院後二條治七年九十一代(叢書^{二六}六)

の記事である。今上院とあるは全く奇怪で、それに就ては廣瀬廣一氏の手譯本も矢張此の點に不審を抱き、

今上院とあるに依り、案ずるに本書の原本、當代の年祿を用ひしならん。

と冠註朱書して居るが、第三本たる群書類従本が曆應元年前後を以て、妙法寺記と區劃したことから考ふるに、第三本の初に

曆應四、本院治十年光長寺第二日法上人御遷化(叢書^{二六}七)

とあるが、日法の遷化に就ては日潮の別頭統紀は、此年八十歳の入滅(全書本^{三四}八)といひ、日因の御物語聽聞鈔佳跡上には全年八十三歳(富士宗學要集^{一〇六}二)とするが、若し前説に依れば嘉元元年は日法聖人五十二歳であり、後説に依れば四十五歳の時に當るのである。且つ上述の諸點の重點たる

一、嘉元元年を今上院と記すること、

二、第三本の群書類従本が日法遷化を以て分割すること、

三、宗祖を日蓮大聖人と書し、光長寺の開山日春聖人の遷化を記入せること、

是等の諸點を綜合して妙法寺記の原本は恐らく日法聖人に依て書かれたものと推斷するものである。即ち日法聖人が依憑すべき原本から傳寫され、或は誰人かの傳寫せるものを相承し、それにその後の出來事を前記録に準じて次第

に記入し來つたが、偶々曆應四年遷化せられ、且つそれが妙法寺に傳へられ、歴代の住持がその後を書き繼ぎ來つたものが、妙法寺記として後世に傳へらるゝに至つたのであらう。

而して群書類従本又は曆應本と、文化版の文正本との相違を生じたのは、前にも述べた如く文正以前の記事が、大體最初からの記事と同一程度の内容を以て書かれたこと、即ち日法聖人が傳寫されたらうと思はれる部分と、同一の態度を以て書かれたこと、且つ此の筆者が傳寫された日法聖人かと思推せらるゝのと、文正後に日朝聖人が遷化せられて、その記事以後従前の偶然的年代記の書繼ぎの態度を全然革め、妙法寺を中心として甲駿越乃至東國地方の記事を多く掲載するに至つて、従前の妙法寺に傳はつた記録でなく、全く妙法寺の記録となつた故に、その紙數に於ても約九分の一の年間に、十倍もの記録を見るに至つたのである。故に文正以後を妙法寺記として別行するに至つたのであらう。かくの如く日朝聖人遷化後記録の態度の革まつたのは、日法聖人の所持本が妙法寺に傳はり、日朝聖人在世の頃までは従來と同様の態度を以て書き繼がれたが、日朝聖人の遷化後偶然誰人かゞ態度を革めたのが俑を爲して、今日の如き妙法寺記が出来たのであらう。且つ最初に「甲州東郡久速立正寺開山先師日朝聖人」とあるに依れば、日朝聖人の弟子中の誰かであり、連文に「弟子七十人」とある中の一人であつたらうが、誰かは不明である。

五

上來の記事に依て妙法寺記の初の方は、粗ぼ日法聖人の傳寫かと想像せられるし、又中間は妙法寺の住僧、後分の所謂妙法寺記の分は日朝聖人の弟子等、妙法寺の住僧に依て次第に書き繼がれたのであらう。その中殊に吉田、久速（叢書二八久速は久速の誤か）身延、小石澤（和）等の寺院關係の記事に就ては、折を得て研究を進めたいと思ふ。

要するに後の分は大體郷土史の史料が本書の價值であつて、此の點はそれ／＼専門の研究を俟つものである。

併し乍ら今此に研究せんとするのは、日法聖人寫傳と思はるゝ原本に就てである。前にも述べた様にその内容は、佛教の傳來を起點とする佛教文化史を中心として、天變地天と重なる治亂興亡の記事である。故にその中心記事からして佛者の手になつたことゝ、佛者に依て筆錄相傳し來つたことは、その所在が妙法寺である點からも動かぬ點である。更に然る所以を物語るのは、群書類從本の文政九年の奥書には

記錄中如_レ與_レへ、雲與_レ雪、賈與_レ買、光與_レ石、充與_レ宛、處與_レ所、當與_レ常、賢與_レ賀、陳與_レ陣、年與_レ事、結與_レ談、逼與_レ逗、遣與_レ遣、乘與_レ憲、繩與_レ綱、貞與_レ眞、餓與_レ餓、鋪與_レ敷、訛與_レ訛之類、雖_レ魯魚可_レ疑亦有_レ不可_レ疑、悉從_レ原本_レ而不_レ改治刻刷印公_レ諸世_レ、管見旁加_レ朱圈_レ、以正_レ後之君子_レ焉（三〇輯上三五）

等と寫傳本の字様に就て述べて居るが當字誤字は筆者に依て逸れざる所であるから、全く「雖_レ魯魚可_レ疑亦有_レ不可_レ疑」といふ如くである。然るに文化本の跋には

亦字體升作_レ牛、被作_レ皮、管作_レ官者省字也。候作_レフ、外作_レイ省略字也。或石訓_レ加多之、痘訓_レ毛、劣訓_レ萬久_レ、捌訓_レ左八九_レ等古訓、而益_レ於考古學者_レ

とある省字、略字、古訓であるが、この中最後の古訓は自らその時代的特長を有するもので、古訓に依てその時代を知る手懸となるのである。若し省字略字はこれ今日の如く活版術の發達せざる時に在ては、悉くが總て筆寫に依つたのであるから、何時しか省字略字の間に一定の約束が生じて、省字略字に依て筆者の勞を幾分なり省かんとしたものである。併し乍ら右の文に掲げたのは、概ね一般的に共通するものであるが、「甲斐叢書」本の妙法寺年錄に菩薩をササ（三五三）に作る獨特の略字は、これ佛者の約束であるから此の點が、我等をして佛者の寫傳と斷定せしめた點

である。

然らばその原本に就ては、日法聖人四十五乃至五十歳時代の記事に、前述の如く「今上院」の文字のあつたことは、廣瀬氏所持本に「原本は當代の年録」との註に依て、日法聖人と思推せらるのであるが、然らば日法聖人は果して誰人の筆録に依られたかゞ問題である。

六

由來日法聖人は日蓮聖人の弟子中、最上位の六老僧に次ぐ、十八中老僧の筆頭であり傳は別頭統記第十一に見ゆるが文に

高祖身延隱棲之間、溫_レ席扇_レ床、具竭_二孝恩_一矣

とある如く常に側近に侍して給侍相勤め、且つ彫刻に秀で曾て身延山に於て百尺の檜を得て、百年の後似像を残さんとして、宗祖の聽許を得て等身の像三軀を刻み、身延、池上、比企に安置し、又殘木を以て一軀を作り、後常在日朝妙光寺を創立之を安置し、又宗祖滅後中山、小湊、那瀬妙法寺、濱法華寺、京妙顯寺、休息立正寺の像は皆その作に拘はると傳へる。何れにもせよ日法は身延常在給侍の點から見て、今の年録の原本は恐らく、日蓮聖人の御所持本よりの寫傳にはあらざるかと思はれるのである。

然らば日蓮聖人の御所持本に右様の年録がありしや否やといふに、日蓮聖人は有名には註法華經十卷、それは遊學中諸經論釋の要文を經典に記入し、常にこれを所持して居られたのみならず、その他重要な經論釋の拔書も座右に置かれて、御述作御消息も書かれたのであるが、佐渡御流罪に當つては十月十二日龍口法難の折、松葉ヶ谷の御草庵に於

て御召取の折には種々御振舞鈔に

平の左衛門尉が一の郎従、少輔房と申す者はしりよりて、日蓮が懷中せる法華經の第五ノ卷を取り出して、おもてを三度さいなみて、さんさんとうちちらす(九一)

とある如く、註法華經も此の始末であつた故に、文永九年三月佐渡より弟子檀那宛の佐渡御書には

外典鈔、文句二、玄、四ノ本末、勘文宣旨等これへの人々もちてわたらせ給へ、(八二)

外典ノ書、貞觀政要すべて外典の物語、八宗の相傳等此等がなくしては、消息もかゝれ候はぬに、かまへてかまへて給候べし。(八三)

とある如く、此の中に見ゆる如き外典の書、外典の物語等も集められて居り、随つて是等の中に、最初寫傳の妙法寺記の如き外典書のあつたことは想像に難くない。而して此等に就ては身延山歴代の聖教目錄(山川博士「日蓮聖人研究」第二^{五九}、身延山史六八)並に永仁七年(AD一二九九)の中山の初祖富木常忍の「常修院本尊聖教事」や又康永三年(AD三四四)中山三祖日祐の「本尊聖教錄」(日蓮宗々學全書、上聖部^{一八三}四〇四)等を見れば、御眞蹟並にその寫傳等と共に外傳書並拔書等が相當保存せられたことは明かである。

先づ其内中山の祐師の本尊聖教錄には、十七の大綱要文等の下に

兩朝略年代記

一帖

紹運圖

一帖

王代記

一紙(日蓮宗々學全書、上聖部^{四二})

又三十四の外典の下に

『妙法寺記』並にその原本に就て

『妙法寺記』並にその原本に就て

帝年錄 三帖

唐年代記 一帖

私漢年代記 六帖(全上四三)

等の書名が見え。身延に於ては十一代日朝聖人の靈寶目錄に

日本佛法次第事(第七箱)、(身延山史七〇)

王代抄(第五箱)、(全上七一)

等が見え十二代日意の大聖人御筆目錄(日蓮聖人研究、第二〇二五)にも同様に兩書を掲げ、第廿一代日乾の靈寶目錄には、御眞蹟の本末並に破損箇所等を綿密に記し、明治八年不慮の回録に身延山珍藏の御眞蹟の悉く烏有に歸して知る由のない今日、その内容の一斑を知り得る重要な記録であるが、それに依れば日本國佛法渡次第事に就ては

都テ大和國高 此間文字損失

敏達天皇孫

皇子

聽衆一百人沙彌一百口文

已上廿五紙

表裏共御筆也、但奥

十五紙ノ分裏ニ有之

初十紙ハ表ニ斗出ス(全上五三)

とあるに依れば、本書でないことは明かである。若し王代抄に就ては

一、王代抄裏、御筆也、十五紙（全上五三）

とあり、又廿九代日筵の目録には王代抄はなく、漢土日域佛法事一卷（全上五五）^八が加へられて居るが、此等は今日何れも傳らぬ故にその内容を知るべきではない。恐らく是等の中王代抄、帝年錄等の如きものが、今の妙法寺記の寫傳の源をなすかに思推せらるゝのである。前述の如く日法は身延時代の常隨給侍の一人であつた故に、折を得て是等の年錄を傳寫し、又は六老僧等の傳寫本を相承して所持したことも、あるべからざることではない。

七

上述の如く妙法寺年錄の原本に就ては、今日の文獻上判然とこれを斷定し得ぬことは甚だ遺憾であるが、併し上述の如き考方も必ずしも無暴の推論では無からうと思ふ。今此の事實を反證するために、日蓮聖人御遺文中同様の記事に就て、その研究を進めて見るも一方法と信ずる。

日蓮聖人の遺文は現存するもの實に四百數十篇に及び、日蓮聖人御遺文の靈長閣版（縮刷）に悉く編年體に編輯せられて居るが、立正安國と日本の柱を以て任じた聖人の著作、並に御消息には常に上代よりの皇國治亂の歴史的事實を指摘し、蒙古來の國難に對し精神動員を絶叫せられたのである。就中

祈　禱　鈔　（文永九年）　縮刷　八九四

曾谷入道殿許御書　（全十二年）　全　一〇九六

撰　時　鈔　（建治元年）　全　一一九八

三三藏祈雨事	(全 年)	縮刷一二五四
神國王御書	(全 年)	全 一三四九
報 恩 鈔	(建治二年)	全 一四五五
下山御消息	(全 三年)	全 一五五五
本尊問答鈔	(弘安元年)	全 一七九四

等は就中皇國の治亂に就て述べられたものである。

以上の中にも祈禱鈔の如きは、承久の亂に就て詳説して

承久三年辛巳四月十九日、京夷亂時、爲關東調伏、依隱岐法皇宣旨、被始行御修法十五壇之秘法、乃至五月二十一日武藏守殿カ(東)海道より上洛、甲斐源氏は(東)山道を上る。武部殿、北陸道を上り給ふ、乃至七月十一日本院隱岐國へ被_レ流給、中院阿波國へ被_レ流給ひ、第三院佐渡國へ被_レ流給ふ。九〇

等と記して、吾妻鏡二十五(古典全集五、五三)の記事と全く合致するのである。而して右の中年代を最も廣く擧げたのは神國王御書で、神世十二代に筆を起し、

第一の王は神武天皇此_レはひこなきの御子也、乃至

第十四は仲哀天皇_ハ御父也_ハ幡

第十五は神功皇后_ハ御母也_ハ幡

第十六は應神天皇、仲哀神功御子今八幡大菩薩也、乃至

第二十九代は宣化天皇也。此時までは月支漢土には佛法ありしかども、日本國にはいまだわたらず。

第三十代は欽明天皇此の皇は第二十七代の繼體の御嫡子也、治三十二年。此の皇の治十三年壬申十月十三日辛酉百濟國の聖明皇金銅の釋迦佛を渡し奉る。今日本國の上下萬人一同に阿彌陀佛と申此也。乃至欽明・敏達・用明の三代三十年は崇給事なし。其間の事さまざまなりといへども、其時の天變地天は今の代にこそにて候へども、今は亦其の代にもにるべくもなき變天也。

第三十三代 崇峻天皇の御宇より佛法我朝に崇られて

第三十四代 推古天皇の御宇に盛にひろまりき。此時三論宗と成實宗と申宗始て渡候き、乃至

人王三十六代 皇極天皇の御宇に禪宗わたる。

人王四十代 天武(天皇)御宇に法相宗わたる。

人王四十四代 元正天皇の御宇に大日經わたる。

人王四十五代に聖武天皇御宇に華嚴宗を弘通せさせ給。

人王四十六代 孝謙天皇御宇に律宗と法華宗わたる。しかりといへども唯律宗計弘て天台法華宗は弘通なし。

人王五十代に最澄と申す聖人あり法華宗を我と見出て(中略) 同き御宇に空海と申人、漢土にわたりて眞言宗をならう。しかりといへどもいまだ此の御代には歸朝なし。

人王第五十一代に平城天皇の御宇に歸朝あり。

五十二代の嵯峨天皇の御宇に(中略)傳教大師御入滅の一年の後也。

人王五十四代 仁明天皇の御宇に圓仁和尙漢土にわたりて重て法華眞言の二宗をならいわたす。

人王五十五代 文德天皇の御宇に(金蘇二經疏を造り)大日經義釋に竝べて眞言宗三部とがうし(中略)

人王八十一代をば安徳天皇と申す（中略）

人王八十二代は隠岐ノ法皇と申高倉の第三の天子、文治元年丙午御即位、

八十三代には阿波ノ院、隠岐ノ法皇長子、建仁二年に位に繼給。

八十四代には佐渡ノ院隠岐ノ法皇第二ノ王子、承久三年辛巳二月二十六日に王位につき給。同シき七月に佐渡の島にう

つされ給。（一三四九
五三）

と以上の如く約廿一代に亘つて、相等重要點に就てのみ記述せられて居るのである。

八

以下且く皇位のみを中心として神國王御書と妙法寺年錄とを對照して見やう。

（皇位）

（神國王御書）

（妙法寺年錄）

二九代 欽明天皇

三〇

？

三〇代 敏達天皇

（三一）

？

三一代 用明天皇

（三二）

三〇

三二代 崇峻天皇

三三

三〇

三三代 推古天皇

△三四

三四

三三代 舒明天皇

（三五）

三五

三五代 皇極天皇

△三六

三六 舒明

◎四〇代	天武天皇	△四〇	四〇
○四四代	元正天皇	四四	四五
○四五代	聖武天皇	四五	四六
○四六代	孝謙天皇	四六	—
◎五〇代	桓武天皇	△五〇	五〇
○五一代	平城天皇	五一	五〇
○五二代	嵯峨天皇	五二	五〇
◎五四代	仁明天皇	△五四	五四
◎五五代	文德天皇	△五五	五五
○八一代	安德天皇	八一	七八
○八二代	後鳥羽院	八二	七九
○八三代	土御門院	八三	—
○八四代	順德天皇	八四	八一
		佐渡院	

以上の如く三つが一致するのは◎印の天武、桓武、仁明、文徳の四代である。随つて遺文と年録とが一致するのは右の外△印の推古、皇極のみで都合六代あるが、歴代と遺文と合致するのは◎印の十三代である。

斯の如く年録と遺文とは歴代の御順位に就ては甚だ不一致であるが、年録が數回の傳寫と三十代、五十代の如く判然記入なき如き無關心で書かれたことも想像に難くない。孰れにしても此の點からでは宗祖の王代記等と年録との一

致は見出し難く、随つて年録は必ずしも宗祖の年代記の傳寫か否かも疑はれることになるのである。勿論當時歴代の御順位も決定的でなかつた故に、異説が無いことも斷定し得ぬのである。併し乍ら神國王御書に

前時の天變地天は今の代にこそにて候へども、今は亦其代にはにるべきもなき變天也^{一三}
五〇

とあるのは、年録の記事と關係最も深いのである。故に年録は宗祖のと同じ記録でないにしても、少なくとも別の系統のものではなく、宗祖の御所持本中神國王御書等の依らざる、他の年代録であつたとも想像出来るのである。要するに上述の如き結論は、二卷本以上妙法寺年録全體として

一、日蓮聖人を始め日蓮宗の一貫せる記事の存すること

二、日法の草創する木立の妙法寺傳來の古記録なること

三、日法の遷化よりの異本の存すること

四、立正寺、光長寺、妙法寺が勝劣に轉派せる時本果日朝の遷化を劃し妙法寺記二卷本として別行せること

五、宗祖と日法聖人と妙法寺と不可分の關係にあること

六、ササ菩薩等の如き佛教者慣用の略字を用ゐしこと

是等を綜合して、妙法寺記の原本は宗祖の王代記等の寫傳本の連續に依る記録と斷定せざるを得ぬのである。

随つて郷土史料としての武田氏等を中心とした吟味は一般郷土史家の批判に俟つのであるが、佛教關係就中宗門關係の記事に就ては久速を久遠と作る如き類は、此の以外になしとは斷定出来ぬが、それ等の點の研究摘出に就ては、他日を期することにする。最後に大方の是正を俟つ次第である。